
XXX吸血鬼（クロスヴァンパイア）

空海陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

XXX吸血鬼（クロスヴァンパイア）

【Nコード】

N5350E

【作者名】

空海陸

【あらすじ】

仮想18世紀、英国　吸血鬼の戦から約100年の月日がたち、国は平和が戻っていた。だが、まもなくまたやってくる。100年前と同じ緋い満月　。それは、知ってよかった真実なのか、悪かった真実なのか、戦と世界を救った吸血鬼の血をもつ兄弟は、世界に散らばった、別の吸血鬼の遺伝子を持った禍々しき者達を、この世から消し去るため立ち上がった　。

Opening

それは、とても明るい満月の夜だった。

だが、いつもとは違う

緋^{あか}い緋い満月だった。

ガタンッ。

そんな中、誰もいない不気味な墓地で音がした。

ガタガタガタガタ…。

その音はだんだんと大きくなり、最後には

“ガッタン”

と音をたて、静かな墓地に響かせた。

そこにあつたのは 棺桶。その棺桶から出てきたのは、人
いや、

人の生き血を吸う者、吸血鬼だつた。

そして、その吸血鬼の周りにも同じような棺桶があつた。

それらも同じように開き、同じような姿 黒い服、紅い眼、顔
や服の露出している所のあちこちの傷、そして、尖つた耳に牙をし
て棺桶から出てきた。

緋い満月 。それは、吸血鬼の晩餐会の合図。

墓地は、気がつけばさっきの静けさは消え、木々たちがざわついていた。さらには、吸血鬼たちの周りにいる羽をばたつかせている大量のコウモリの群れの音が入り、静けさは完全に消えた。

「おはよう。今日も私たちの食事を邪魔してきたのかな？「裏切り者さん」」

最初に起きあがった吸血鬼が目の前のコウモリに言った。だが、彼はコウモリに言ったのではなかった。

「おや、とうとう僕は“裏切り者さん”になってしまったんですね。」
「それは、コウモリの後ろの木々の間にいたのは、人
いや、

彼らと同じ吸血鬼だった。

だが、彼らとはだいぶ違う。

耳と牙は彼らより尖ってなく、眼は、透き通ったような蒼あお、服は彼らと正反対の白を着ていた。

そして、彼にも黒い彼らと同じように仲間が木々の間から出てきた。

「ほうく仲間を連れてきたのか？…って言っても、お前の仲間は全員“人”だろ？」

そう言うと、黒服の主は自分の牙をむき出しにした。そんな、光景を目の当たりにしたとしても、白服の主は『ニコニコ』と笑っていた。

それもそのはず　。

彼はもともと黒服の彼らと仲間だったのだから彼らのことは知っているも当然だ。

「失礼ですねえ。彼らも貴方の仲間ですよ。…ただ、貴方に愛想が尽きてしまったようで　もちろん、僕もですけど……」

その時、話の途中だというのに、黒い主が凄く速さで白い主に牙

をむき出しにし、向かっていった。

だが、白い主は軽々とその攻撃を横っ飛び避けて、言いかけていた言葉を発した。

「ねっ」

そして、白い主はまるで猫のように、“スタッ”と着地した。

「!？」

“つうー”

それと同時に、白い主は何か顔が顔をたれ流れているのがわかった。

血だ。

白い主はそれを拭くと同時に、前にいた黒い主は“にっ”と笑い、口に付いていた血を舐めた。

「…どうしたよ。俺達が寝てる間、体が鈍っちゃったのか？この前より、動きが鈍いぜ。クロノ・クロス」

「…そうですかね？僕は、そんな風には感じませんがね。まあ、僕は街の人たちに『貴殿方を殺れ。』と言われてるんで。…それより、さっきの攻撃は何なんですか？貴方も、寝ていたから、体が鈍くなってるんじゃないですか？ガイラル・スカー。」

そう言うと、白い主の眼のいろが気がつけば蒼から緋に変わって

いた。

「へっ、お前よりかはましき。人と同化したお前よりかはなっ！…まあ、その眼を見る限りだと、まだ吸血鬼の血は流れているんだな。」

「あたりまえじゃないですか。もともと、貴方の元にいたのですから。けど、吸血鬼は傲慢欲深いですねえ？本当はこんな血は僕には要らないですよ。…まあ、今日は仕方ないのですが。」

「そうか…残念だな。これが、お前の最後なんてな。」

「貴方の最後かもしれませんよ？」

「へっ…」

そして、これが彼らの最後の言葉の掛け合いだった。

「さて……。」

「さあ……。」

“ジリジリッ”

「最後の晚餐と行きますか！！！！」

二人は、お互い構えると同時に叫び、二人が連れる互いの部隊が戦いを始めた。

真上にある大きな大きな緋い月の光を受け、吸血鬼たちの戦いが始まった。

第1夜 黒き者達（前書き）

作者を知ってる方々、「別のも更新しろ！」と言われてもおかしくない状態で、連載を始めた、XXX吸血鬼。（だって、PC制限されてるから、時間が…。）

待っていた方々、お待たせしました。XXX吸血鬼をとうとう連載しますっ！ある意味、期待されていたら、そして、外れることがあるなら先に謝るとききます。スミマセン；；；；

そして、「空海陸？そんなのしらんわあ。」っていう方々、はじめまして。XXX吸血鬼作者の空海陸です。

実際には、これが初めての作品ではなく、サイトの方に、何個か連載（？）してあります。（その前にはいくつかのボツがorz）気になる方は紹介の方にアドレスを書いときましたので気軽にどうぞ。

とは言いましたが、正直なところ、あんまり進んでいません。

「それでもいいから見せる！」と言う方は本当にどうぞ。

そして、ここに初めての投稿なので、先輩がた。どうか何でもいのでアドバイスをください。それでは、続きをお楽しみください！

第1夜 黒き者達

その戦の日に出た、緋い満月はそれ以来なかった。それよりか、次の日からは「人が襲われた。」という、情報もなかった。

仮想18世紀、英国。

その戦から約1000年たつ。

国は、あの頃の面影はなく、街の人たちは笑顔であふれ、そしてにぎわっていた。

そして、あの時のことは誰も知らない。

そんな中、奇妙な紅い眼を持った黒い『何か』が街全体をキヨロキヨロとさせていた。もちろん、それに気づくものは誰もいない。

紅い眼は、“ピタッ”と眼を止め何かに光らせると、その場から“フツ”と消えた、その瞬間だった。

“ぶしやあぁっ”

何かが吹き出す音があった。そこには、1人の人間が血を吹き出して倒れているのと、その近くにいた さっきの黒い『何か』だった。

黒い『何か』からは、紅い眼がキラキラと光っていて、とても禍々しく見えた。

「キヤアアアア…！！！！」
「うわああああ…！！！！」

街の人たちは、恐怖を隠せないまま、悲鳴をあげ、その場から後ずさってしまった。

そんなことはお構い無く、黒い『何か』はまた紅い眼をキョロキョロとさせると同時に『何か』が姿が現した。

その姿は、まるで獅子のような姿だった。だがそれは、普通の獅子ではなく、体全体が黒、眼は紅色、何より違うのは、六本の足で立っているということだった。

獅子の化け物は、また眼を光らせると、獲物を捕らえるように、今度は目の前の人間を襲い、襲われた人の体は、首から上がない状態に倒れた。

「…ひつ！！！！！！」

街の人たちは、それを見ると、もう恐怖に怯え、声も発せなくなっていた。それを見た獅子の化け物は“にたあ”と笑い、吠えた。

「グオオオオオツ！！！！！！」

すると、それが合図だったかのように、さっきの黒い『何か』と同じようなものがたくさん、獅子の化け物の周りに跳んできた。そ

れらも、紅い眼をし、見ると獅子だけではなく、トラやヘビ、さらにはもう獣の形をとってないものまでたくさんいた。

「うわあああああ………！！！！！！」

「化け物……………！！！！！！」

それを見た街の人たちは、目の前の獣たちと目があつた。その瞬間、人たちは彼らに背を向け、叫びながら走っていった。それを追いかけるように黒い獣たちは襲い始めた。

人たちは、到底かなうわけがなかった。

もうすぐ、夜になろうとしている街に、太陽がいつもより紅く染まった気がした。

「…っち、遅かったかつ！」

少しして、さっき黒い獣がいた場所に二人の人間がいた。二人とも白い服を着て、蒼い眼をしていたが、ちょっと違うのが、一人は右頬と左目の下に傷、もう一人はメガネをかけていた。

二人は、今さっきこの街に着いたばかりだった。

「…それにしても、数が多すぎじゃないか？これを二人でやるのは、難しいんじゃないか？」

「何いってんだ、そんなこと言っただって仕方ないだろ、それに俺達
が殺らなきゃ誰が殺る。」

「そ…だな。」

その言つと、二人はその場から去った。

第2夜 兄弟

気がつけば、街のあちこちは半壊し、壁には紅い液体がかかって
そして、その近くには、手や足、最悪、顔がない人の死体があった。

「は…っ、は…っ」

そんな中を、一人の少女が走っていた。その後ろからは、牛のよ
うな姿をした、黒い獣に追われていた。少女の体力はもう限界まで
達していた。それでも少女は走り続けた。そんなときだった。

“ガッツ”

「キャッ！…！」

少女は、石に躓き転んでしまった。獣はもうすぐそばまで来てい
た。

「キヤアアアアア…！！！！！！」

少女はもうダメだと思い眼をつぶった。

「……………?」

けど、何も起きない。眼を開けても身体には何もなかった。すると目の前に、一人の人間が、さっきの獣を抑えている光景が目に入った。

(うそ…あんな、大きな物体を抑えている!?)

少女は、獣を抑えている人間と目があった。

彼は、白い服に、蒼い眼をして、そしてメガネをかけていた。

さっきの、白い服の青年だ。

「逃げる!」

「え……………」

「逃げるんだ!この道をまっすぐ行けばいい。わかるよね?」

「う、うん。けどっお兄さんは…大丈夫なの!?!」

少女は、そう言つと、恐怖から不安な気持ちでいっぱいになった。

そんな少女にメガネの青年は微笑んだ。

「大丈夫。これが僕達の仕事だから、それに、こういう奴らと何度も戦っているからね。…さあ、行きな!」

そう言つと、青年は自分のことに集中するようになった。その間に少女は逃げようとしたが、彼女の足は限界まで走り続け、さらにはつまづいたせいでもあるのか、彼女の足は一步も動かなかった。

しばらくしても、彼女が動く気配が無いのに、気がついた青年は叫んだ。

「どうしたんだよ、早く逃げろ！」

「そう言われても…足が…動かない!!」

「何っ！」

メガネの青年は迷い、そして困った。

(くっ…、ここで手を放したらこの子の命は無い。……。それにしても、こいつ…なんて力だ！僕の力でも抑えきれないっ！)

青年は、また考えた。けど、考えれば考えるほど彼の身体は、化け物に押されていた。(このままじゃ…彼女にも被害がっ！)

そう思った時だった。

「聖なる光よ、幾度の槍となり解き放て 『ホーリーランス』」

”!!!”

「!!!」

彼の上空から声が聞こえた。彼は即座に反応し、少女を連れそこから離れた。それと同時に、牛の化け物の上空から雨のように光の槍が降ってきた。

「ガアアアアアアアアアア！！！！！！」

光の槍は、化け物に直撃し、一瞬にして化け物は跡形もなく消えた。

化け物が消えた場所に、さっきの青年が少女を連れ、戻ってきた。同時に彼の前に、同じような白い服を着た彼より背の高い青年が“スタツ”と降り立った。

その彼は、右頬と左目の下に傷をつけている　　さっきのもう一人の青年だった。

「フォーカーっ！僕を殺す気がっ！」

メガネの青年は、少し怒っていた。だが、フォーカーと呼ばれたその青年は、“さらり”と答えた。

「失礼だなあ、俺は、お前が『ちゃんと逃げる』と思ったからあそこで放ったわけ。要するに、俺はお前を信じてるわけ。」

そう言うと、フォーカーはメガネの青年の目の前にきた。そして、

フォーカーは…

“バチンッ”

自分の指先で、メガネの青年の額を弾いた。

さすがに痛かったのか、メガネの青年は

「いたっ」と呟き、額をさすった。さすりながらフォーカーの顔を見ると、困った顔をしていた。

「だいたい、俺が来なかつたらこの子は被害に合っていたんだ。わかるなファイ？」

「う…。」

フォーカーに罵られた、ファイと呼ばれたメガネの青年はうつ向いてしまった。

それと同時に、ファイが助けた少女の顔が優しい表情になっているのがわかり、ファイは少し“ホッ”とし、同じように表情がゆるくなった。

「ごめん…兄さん、それにしてもあれで最後だったのか？」

「ん？ああ、じゃなきゃ俺はここにはいなかったぞ。“力”は“力”でも限度つてもものがあるからな。もし、俺が来てなかつたら、少し苦戦していたかもな。」

「まあ…ね。」

そしてまた、ファイはうつ向いてしまった。けど、今度は怒っていないのに、うつ向いてしまったファイを心配したのか、フォーカーはファイに問いかけた。

「ん？どうしたんだよ。」

「ごめん…僕…兄さんの足を引っ張ってるかもしれない…。」

そう言われたフォーカーは、ファイの頭を撫でた。ファイは、フォーカーの顔を見ると“にっ”と笑っていた。

「そんなことねえよ。ファイはよくやってくれてる。そんな姿を見ると、俺は元気がでるんだ。」

ファイは、そんなふうにいわれとても嬉しかったのが、泣きそうな顔で笑った。

「ありがとう…フォーカー。」

そう言うと、ファイの眼から一粒の光が　涙が落ちた。その顔を見たフォーカーは、頭を撫でていた手で“くしゃくしゃ”とやっ

「泣くなよなあ。お前は男だろう？」

そう言っているフォーカーでも、心の中ではわかっていた。

違う、ただ泣いてるわけじゃない。これは、嬉し泣き…か。

そう思うと、彼はファイに微笑んだ。

「優秀と言われた俺　落ちこぼれと言われたファイ　。それでも、俺はお前の力を認めてる。」

お互い、力を認め合った二人。二人の戦いはまだ、これから。

街の騒動が終わった時には、夜になって、月は三日月、そして、緋く染まっていた。

第3夜 吸血鬼と過去

三日月が完全に真上に昇ったところ、街は騒動で荒れ果て、あのにぎわいはもうなかった。

だが、そんな中にも、動いている人間がいた。そして、その人間たちは、街の真ん中の広場に集まっていた。

広場に集まっていた人たちは、軽い怪我で済んだ人から死にそうな人までいた。

そして、その中にさっきの白い服を着た青年たち、フォーカーとファイがいた。

「ありがとうございます。おかげで、街は全壊を免れました。」

ファイが助けた少女は目を覚まし、街全体の見回りをし、生きている人がいれば助け、死んでいる人がいればそこで短い黙禱もくとうをしてきた。

もちろんフォーカー達も、彼女は断つたが『これも仕事の一つだ。』といい、彼女の手伝いをした。

「すまなかつた…俺たちがもう少し早く着いていれば、こんなことはなかつたのに…。」

「いえ…、あなた方が来てなかつたら私も、今頃あの化け物の餌食になってましたし、それに…私たちがじゃあれを倒すのは不利…あなた方は、ただの“人”だとは思いませんし、それに、あなた方が言っている“仕事”、そして、なぜあの化け物を知ってるのか。不思議です…。」

「……まあ、確かに俺たちはただの“人”ではない。ましてや、あんな“化け物”の仲間じゃない。」

そう言つとフォーカーは、何故か“はあ〜”とため息をついた。

「けど…これ言つと、引かれるかもな…。」

フォーカーがそう言つてる横で、ファイは“コクコク”とつなずいた。

「確かに…けどそれは、いつもの事なんだし、言つちやええば?」「…?」

少女が首を傾げるなか、フォーカーは、話始めた。

「俺たちは…吸血鬼だ。」

「え…。」

フォーカーは、そう言うと、突然口を大きく開けた。

「…!!」

その口をよく見た少女は、その光景に驚いた。

そこには、鋭く尖っている牙があった。少女は、フォーカーの隣にいたファイの方を向いた。ファイは、少女が言いたいことがわかったのか、ファイもフォーカーと同じように口を大きく開けた。ファイにも牙があった。

「貴方も…!!?」

「そう…僕も…。」

少女は、驚きを隠せないまま、フォーカーたちに問いかけた。

「けど、吸血鬼は…人の生き血を吸う、生き物だよね!? そんな“吸血鬼”さんたちがなんで、私たちを助けるの?」

「ちよっと…ね。」

ファイは、少し気まぎらくなって、声が小さくなった。けど、少女

はその後が気になるのか、大声でいった。

「ねえ！続きは！？教えてよっ！！」

「……………」

その、問いにファイは困ってしまった。そんな、光景を見ていた、フォーカーはすでに口を閉じ、声を出せる状態でした。フォーカーは、困った顔をして、少女に近づき、喋った。

「…言っではいけないんだ。まあ…、俺たちの“過去”が関係してるんだけど…ね。」

「か…こ…？過去って…あなたたちの過去って…。」

「いや…、俺たちの過去じゃない…もつと前の…先祖の過去だ。」

「先祖の…過去って？」

「あれが…さっきの獣たちが少し関係してるかな？」

「????？」

少女の頭は、ハテナでいっぱいでもたまた首を傾げた。それを察したファイは、フォーカーに言った。

「フォーカー、まずは獣 『ダーク・シエイダー』 について話

してやったらどう？」

「おっと、そうかもな。」

そう言っってフォーカーは、自分の腰に着けているポーチに手を突っ込んだ。そして、そこから何かを取り出した。

第3夜 吸血鬼と過去（後書き）

フォーカー、ファイ（正式名ファイレル（いつかだします。）が鍵となるこの話 活躍を早く書きたいと思うと、書いている自分も楽しくなってきましたっ！

第4夜 黒い石

フォーカーが、そこから出したのは、小さい箱だった。そしてその中には、小さな真っ黒い石の欠片がいくつも入っていた。

「綺麗…。」

少女はそう言つと、その石に触ろうとしたが、それを拒む手があった。

「ダメだ。君みたいな一般人が触ったら、大変なことになる。」

「え…?」

その手を拒んだのは、ファイだった。少女は、少し“ムスツ”となったが、『何か事情があるんだ』と思い、反論をいうのは止めた。そう思つ中、フォーカーは、箱の中の欠片を一個取り出した。そんな光景を目にした少女は驚いた。

「えっ、なっ、なんであの人、触れるの!!!?」

少女が驚いていると、隣にいたファイが、“ぼそっ”と少女の耳元でささやいた。

「ちよつと彼は特別なんだ。」

「特別…?」

そして、ファイは少女には聞こえない声で、言った。

「もちろん、僕もね。」

「えっ？」

ファイは、少女に聞こえてしまったのだと思い、ちょっと戸惑った。

「なんか言った？」

「いや…。」

どうやら、少女には聞こえてなかったようだ。

(ほっ。)

ファイは、胸をなでおろした。その間にフォーカーは、気がつく
と、少女の目の前に来ていた。そして、フォーカーは、その少女に
フォーカーの手にある、真っ黒い石の欠片を見せた。

「これは、あの化け物 『ダーク・シエイダー』 が全てに託さ
れている石。」

「『ダーク・シエイダー』…?」

「ああ、俺たちはそう呼んでいる。そして、この石には、俺たちの
先祖の敵の遺伝子が入っているんだ。」

「貴方たちのご先祖様の敵って…吸血鬼って言うからには、相手は
人だったんでしょ?」

少女は、子供のように可愛く、問いかけた。けど、フォーカーは
さっきファイにやったように“さり”と答えた。

「ハズレ。」

「えっ?じゃ、じゃあ…なんなの?」

しつこいように問いかける少女に、フォーカーは“はあく”とた
め息をついた。

「わーった、わーった。うーんじゃ、ヒント。さっき、お前…えー
っと…。」

「アティラです。」

フォーカーは、“お前”と呼ぶのを何度もするのはさすがにあき
れたのか、少女に名前を聞こうとする前に、アティラと名乗った少
女は先に名を名乗った。

「あ、ああ、アティラだな。何故アティラを助けたかっていうこと。

「……………わからない。」

「……………。じゃあ、ヒント？ 『ダーク・シエイダー』が何故、人
を襲ったか。」

「……………。」

2つのヒントを出したが、アティラはわからないという顔をして
いた。そんな顔にだんだんとフォーカーはイライラしていた。

「あー、じゃあ、最後のヒント。これはわかるはずだと思っただが
…、人の心臓に流れているもの。」

「……………えーっと……………わからない。」

そう言って、可愛く首を傾げた。

“ブチッ”

フォーカーの中の、何かが切れる音がした。

「あゝもう！お前、うぜえ！！お前と話しているとイライラしてくるっ！！こんなにヒント出したにわからないのかよっ！！」

フォーカーはそう言って、アティラに背を向けた。

「うっ…うっ…。」

数秒後、誰かが泣いてる声があった。その声はフォーカーの後ろから聞こえ、もちろん一番始めに気がついたのはフォーカーだった。

(ヤベ…やり過ぎた…。)

そう思ったのは、目の前の少女の泣き顔を見てからだだった。アティラは、フォーカーに怒られて、泣いていたのだ。

「…泣かせた。」
「うっ！」

その光景を見ていたのは、ファイだった。ファイの目は、遠い目をしていた。

「こんな小さな女の子を泣かせるなんて…。」

「うっ…わかった、わかったよ。俺が悪かった！」

そう言っつて、アティラを慰めた。すると、アティラは、顔を押しさえていた手を離し、まだ兎の目のように赤い目で、フォーカーを見た。

「じゃあ…教えてよっ…、ぐすつ。」

「わかったから…。もう泣くなよ…。」

フォーカーは、そんなアティラの頭を撫でた。

「ファイ、こんな風に言われたら、お前だったらどうする？」

「…断りきれないし、今フォーカーが考えていることを考えているかもね。」

「わかった。…じゃあ、誰にもこのことは俺たちが話したことを言わないっていう約束してくれるなら…。」

フォーカーの、問いかけにアティラは、即座に答えた。

「うんっ！誰にも言わないよっ！」

「わかった。約束だ。」

そう言って、フォーカーはさっき話してた、『あまり郊外には出たくない話』をし始めようとしたその時、

“ガララララララッ！”

「！！！！！！」

何かが崩れる音がした。その音に、フォーカーたちは即座に反応

した。それは、ただの瓦礫が崩れる音ではなかった。

「…っち！まだいたのか！」

そこには、彼らが知ってる、あの化け物
「ダー」がいたのだった。

『ダーク・シエイ

第5夜 ダーク・シエイダー

だが、そこにいた『ダーク・シエイダー』は、さっきのよりも二倍：三倍大きく、獣の形をとってはなく、スライムのように伸縮性がある化け物だった。

そんな、大きさに、フォーカーは『ちっ』と舌打ちし、ファイは啞然としていた。

「なんてデカさだ！野郎：かなり血を吸ったな。」
「！」

フォーカーは、そう言っつて構えようとした。その時、

「わかった！」

「キシヤアアアアア…！！！！！」

アティラが、何かわかったと同時に、ダーク・シエイダーが吠え、こちらに向かつて来るのがわかった。それと同時に、ダーク・シエイダーは自分の触手を取りだし、あちこちに散乱させた。

「うわあああ！」

「きやあああ！」

そして、その触手は広場の人々を襲い、触手は人々に絡みつき、そして他の触手で人々胸のの中心にめがけて刺した。

“ぞしゅっ”

触手は綺麗に人々の胸の中心に刺さった。その触手をよく見ると
“ドクツドクツ”と脈打っているのがわかり、気がつけば、その触
手に絡みついた人々は骨と皮だけになっていた。

そんな人々を助けようとしたフォーカーとファイはダーク・シエ
イダーに向かって走り出したが、それは叶わず、触手に道を邪魔を
されていた。

「くそっ！野郎、俺たちを行かせないようにしてるのか！…だった
ら！」

そう言うとフォーカーは、足に力を入れると、宙高く飛んだ。そ
して、右手を挙げると、右手の平に光が集まってきた。

「『ケトル』!!!」

すると、その光がフォーカーの武器になり手に渡った。

その武器は、手にもつところは長い棒になっていて、先には木が
切れるような刃がついていた。

フォーカーは、それを持つと、ダーク・シエイダーの触手に向かっ
て降り下ろした。

「だったらその触手を斬り落とすまでだっ!!!」

そして、その武器を数本の触手に斬りつけた。

「キシヤアアアアアア！！！！！」

ダーク・シエイダーは、また吠えた。だが、それは痛がっているからなのだろう。ダーク・シエイダーは“うねうね”と体をくねらせると、何本かの触手に絡みつかれていた人々が、降り落とされた。

「皆さん！早く、こいつから離れてください！」

手を放せないフォーカーに変わり、ファイが指示を出した。

「ハアアアアアアア！！！！！！！」

フォーカーは、最後の触手を斬り落そうとした、その時だった。

“ムハハッ！”

「！！！！！！！！」

“ スパンツ ”

その時、ファイの目の前でアティラに絡みつかれた触手と、他の触手と共に斬るのがわかった。それは、少し血が頭から流れているフォーカーだった。

同時に、切れた触手と共にアティラが落ちていったが、すぐにファイがキャッチし、“ スタツ ” と地面に降り立った。それを見ていたフォーカーは

「 ナイスキャッチ。 」 と小声で言い、ファイの近くに降り立った。

「 キシャアアアアアア！！！！ 」

ダーク・シエイダーは、また吠え、体をくねらせた。その間に、アティラは目を覚ました。

「 うっ…。 」

「 大丈夫？アティラ。 」

「 また…助けてくれたんだね。 」

「 言ったはずだよ、『これが僕たちの仕事だ』って。 」

「 ……話はそこまでにしろ、ファイ、こいつは、俺一人じゃ恐らく無理だ。…手伝ってくれるよな？ 」

そう聞くフォーカーに対して、ファイは、アティラを地面に下ろすと、自分の服のポケットから指先のない手袋をだし、手につけた。そして、フォーカーのほうに向かって微笑んだ。

「あたりまえだろう。今までもそうだったじゃないか。」

そう言うと、ファイは前にいたアティラに背を向けて、言った。

「アティラ、君は街の人たちを街の外に避難させるんだ。」

「え…。」

アティラは、そういうファイに不安を感じた。

「でも、貴方はどうなるの！？それに…まだいるかもしれないんでしょ!？」

不安になっているアティラに対して、ファイはさっきのようにアティラに顔を向け、そして微笑んだ。

「大丈夫。奴らはもうこの街にはいない。あとは、こいつだ。」

「お兄ちゃん！」

アティラに顔を向けている間、ファイは敵に隙を与えてしまった。ファイは、ダーク・シェイダーの触手に捕まってしまった。

“ スパンツ ”

だが、それはすぐにフォーカーによって斬られた。触手と共にダーク・シェイダーから離れたファイは地面に降り立った。トントン拍子で、フォーカーはファイの近くに降り、そして、ファイのほうを向き、怒った。

「 敵に隙を作るな！ファイレル！！ 」

フォーカーの顔は、いや、目は、今までの、清んだ蒼色は消え、ダーク・シェイダーと同じような紅い眼をしていた。そんなフォーカーの眼を見たことないファイ　ファイレルは、驚き、そして少し恐怖を感じた。

(…… 兄さん …… ?)

その眼はすぐに消え、もとの蒼い眼をした瞬間、ファイレルは立ち上がり、フォーカーの隣に立った。

「 ふっ …… ちょっと油断した。 」

「 これからはないだろうな …… いや、無いと信じる。 」

「 その期待 …… 裏切らないように努力する。 」

「 そうしろ。 」

そう言うと、フォーカーは、アティラのほうを向きアティラに言った。

「街の人たちを頼むよ、本当は俺たちの仕事なんだが、俺たちはこいつを倒さなきゃいけない。」

フォーカーは、そう言っただけでまた、背を向けた時だった。

「さっきっ！」

「？」

アテイラが、フォーカーたちに叫んだ。その顔は、子供染みた顔をしていた。そして、その顔でまた叫んだ。

「さっきの答え…あなた方の敵って“吸血鬼”ですわーっ!？」

そう言うと、叫びすぎたか、アテイラは“ふう”と息を吐いた。その声にフォーカーも叫び、そして笑顔で答えた。

「ああ！」

その答えに、納得したのか、アテイラも笑顔になり、そして、フォーカーたちとは反対の広場にいる、街の人たちの方向に向かって走り出した。それを見たフォーカーたちは、安心し、フォーカーは、さっきの武器を“ギユ”と握りしめ、ファイレルは“ギユ”とつけていた手袋に力を入れた。そんな中、ダーク・シェイダーは少しずつうねりをやめ、触手を伸ばしていた。

「ちょっと喋りすぎたんじゃない？」

「…まあな。けど彼女、引こうとしなかったから、言わなくてもしつこく付いてくださるうな。」

「はは…。」

そう言って、二人は足に力を入れた。

「ファイ、あいつはだいぶ弱ってる。さっきから動きが鈍くなってるからわかるが、さらに鈍くプラス攻撃を阻止できるか?。」

その言葉に、ファイレルは

「ああ。」と答えた。

「んじゃ、行きますか!。」

言ったと同時に、フォーカーたちは宙高く飛び、さらに、ダーク・シエイダーは完全にうねりをやめ、彼らに触手が襲いかかってきた。

(それにしても…あの眼は、何だったんだろう…。兄さんは、感じてないけど…。)

ファイレルは、高く飛びながら、さっきの紅い眼　　フォーカ
ーの眼のことを考え始めたが

(いや、今はこいつを倒すことを考え無きゃな。)

と思い、目の前のダーク・シェイダーに神経を集中させた。

第5夜 ダーク・シェイダー（後書き）

な…長かった…;

これより、長いのがこれから先あるのか…な？

正直、携帯を打つスピードが遅いので、更新が遅いです。

（携帯もそうだけど、パソコンの小説はさらに進んでない）泣。（

第6夜 紅い眼

「おやおや、殺り合ってますねえ。」

気がつけば、フォーカーたちの近くの民家の屋根の上に、人がいた。人数は、二人。そして、黒い服を着て、何より目立ったのは、顔や腕の傷だった。

そんな二人は、フォーカーたちの戦いを陰で見っていた。

「それにしても、あの傷は奇妙ですねえ。彼は、私たちの味方なんじゃないませんか？」

そんな言うのは、右目と左目の色が違う。紅と蒼のオッドアイをした、長身の男だった。

「アホ…だいたい、お前がそんな風に言うのはおかしいだろ。」

お前も、俺にとつちや“奇妙”だよ。」

長身の男に対していたのは、ダーク・シェイダーと同じような紅い眼、左右の眼の下に傷を持つ彼より身長が小さい男だった。そんな、小さい男の言い種くそに対して、長身の男は“ニコニコ”していた。

「いつも思うんだけどさあ…お前は“怒り”って感情は無いのか？」

その言葉に対して、長身の男はそれでも“ニコニコ”していた。けど、さっきとは少し違って、眼が開いていた。

「そんなことはありませんよ。ちゃんと“怒り”という感情はありま

す。それに今、怒ってますし。」
「え？」

“ガツンッ”

長身の男は、小さい男の頭を殴った。もちろん小さい男は痛みを感じているようで、頭を押さえていた。

「つつ〜!!!なんだよ、いきなり!」

「だいたい、彼と私を同じにしてほしくないです。私は、力を認められて、あなたたちの仲間にいるんですから。」

「確かに…。奴らは、あの吸血鬼の祖先…俺たちの『傷の吸血鬼』スカーヴァンパイアの敵だもんな。」

小さい男はそう言うと、また、フォーカーたちの戦いを観戦していた。長身の男もそっちを見下ろすと、突然眼に、光がみえた。それは、昇り始めた朝日だった。

長身の男は、少し不満そうな顔を見ると、小さい男に言った。

「帰りますよ、クロー。朝日がそろそろ昇ります。」

「えー…もつとみたいなあ…。」

「だめです。…それとも、ここに置いてっても、いいんですよ？…どんな風になっても知りませんから。」

その言葉に恐怖を感じたのか、クローと呼ばれた小さい男は焦った。

「わ、わわ、わかった、わかってるよ、ヴァイオ！」

そんなクローに対し、ヴァイオと呼ばれた長身の男は、また“ニコニコ”と笑った。

「それでいいんですよ、クロー。さ、行きますよ。」

「…はあ、殺り合いたかったなあ…。ま、いいか。」

そう言うと、二人はそのあとを去った。

彼らを見たものは、誰も、そこにいたフォーカータちさえみ
なかつた。

第6夜 紅い眼（後書き）

新しいキャラ『クロー』と『ヴァイオ』にこれから先の活躍が楽しみです。

もちろん、フォーカーたちにもWW

第7夜 家族

「キシヤアアアアア！！！！」

もうすぐ朝日が昇ろうとしている、荒れた街の中に、フォーカーたちは戦っていた。

「なんだよこいつ！うざいったらありやしねえ！おい、ファイ！足止め、ちゃんとしろよ！」

「そう言われても。。。」

ふと、目に入ったのは、自分たちが立っている地面だった。同時に、ファイレルに一つの案が浮かび上がった。

(そうかつ！)

ファイレルは、早速それを実行した。そして、自分の手で拳を作り、その拳を地面に向けて当てた。

「『ガイアブレイク』！！！！！」

そう言った途端、拳を当てたところから“バキバキバキッ”と音と共に地面が割れ、それはダーク・シェイダーの方に向かっていった。

た。
フォーカーが、いるとわかってながらもファイレルは、やっ

「！」

ダーク・シェイダーに、気を取られていたフォーカーは、それに気づくと、危うくそれを避けた。

そしてそれは、ダーク・シェイダーの足なのかとも言われてもおかしくない“もの”を地面の割れ目に落とした。同時に、フォーカーは避けた場所に立ち、ボソツとファイレルに聞こえない声で言った。

「ファイレル…てめえな…。」

そう言うフォーカーの額には青筋がたっていた。だが、またダーク・シェイダーが暴れださないように、怒るのは我慢した。フォーカーは、足に力を入れ、宙に跳んだ。すると、さっきの武器が手か

ら消え、代わりにまた右手に光が集まり、それをダーク・シエイダーの方に向けると、フォーカーは叫んだ。

「民の肉体を巢食い、生まれし禍々しき者よ！」

まるで呪文を唱えてるかのようにつぶつぶつとフォーカーは言い出すとその光は、だんだんと大きくなり、最終的には、エネルギー砲のようになっていた。

「ごめんなさい……。」

そんな中、フォーカーは、“ボソツ”と言ったのがわかった。

ダーク・シエイダーの中にいる、人の民に。

「我が光のもとに消滅せよ！」

そう言った瞬間、光はフォーカーの手から離れ、ダーク・シエイダーに向かって放たれた。

そう言って、ファイレルは子供のように笑った。フォーカーは、そんなファイレルをみて、肩を竦めた。

「まあな、俺たちは兄弟だから当たり前か。」

そう言って、フォーカーはその場から離れていった。ファイレルは、一歩遅れて、その場から離れた。

街は、緋い朝日に照らされて、紅く染まっていた。

「あつ！お兄ちゃん達！」

騒動が完全に終わり、また静かになった街の中をフォーカーたちが歩いていくと、反対側からアティラが走ってくるのがわかった。

「アティラか。街の人たちを避難させてくれたかい？」

状況を聞いたフォーカーに対して、アティラは子供みたいに笑って言った。

「はいっ！怪我人もいましたが、動いてる人におぶってもらったりして全員、ちゃんと避難させました。」

「そうか、ありがとう。」

フォーカーは、アティラの顔を見ると、“はあ”とため息をついて苦笑いをした。

「…さて、一日が過ぎちゃったな、そろそろ帰るぞ、ファイ。」
「そうだね、帰らないと師匠せんせいが待ってるし。」

二人がそう言うと、アティラは、なんだか寂しそうな顔をしていた。

「あの…帰ってしまうんですか…？」

そんな顔をして言ったアティラに対して二人は顔を見合わせた。

「そのつもりなんだけど…どうしたんだい？」

「そ…その、あの。」

アティラは、寂しそうにしながら、そして恥ずかしそうにしながら、服のポケットから一通の手紙をフォーカーたちに差し出した。
「もし、出来たらこれを隣の街まで 父さんのいる街に行つて、これを渡してほしいんです。一ヶ月に一回の文通です。…友達も、母さんも、知り合いも、あいつらに殺られて届ける人がいなくなつてしまつて、だいぶ、足が動けるようになったんですが、実は私は昔から足が弱いので、遠くまで歩くことが出来ません。」

「で、これを、帰り際に君のお父さんに渡すつて訳か。 どうする？ファイ。」

フォーカーは、ファイレルのほうを向くと、すでにファイレルの顔は困っていた。

「そう言われても、帰らないと師匠が心配するし、次に行く場所を教えてもらわないと…。」

「…そういうわけだ。俺たちは、仕事で次の場所に行かないといけない。残念だけど、君の望みを叶えることは出来ない。」

フォーカーは、少々冷たいことを言うと、アテイラの顔は、恥ずかしそうな感情は無くなり、寂しそうな感情だけになった気がした。フォーカーもファイレルも、そんな顔をされてしまって、しかも、事情があつて歩くのが難しいという彼女の手紙を渡しに行くしかないと思つた。

彼女にとって、父親は大事な存在なのだろう。

“ピーッピーッピーッ…!”

「!」

しばらくして、フォーカーたちがまだ考えてるなかで、何かの警報音が鳴った。

「…ちよっ、こんな時に限って緊急かよ!」

フォーカーは、嫌みったらしくいうと、腰のポーチから今度は通信機のようなものを取り出した。

「あの…。」

まだ、話が終わってない中、そんなことをされると完全に断ったかのように見たアティラは、さらに寂しそうな顔をしてしまい、さらには、二人の前から去ろうとした。

「アティラ!」

そんなアティラに、声をかけたのは、ファイレルだった。ファイレルがみたアティラは、泣きそうな顔をしていた。

「アティラ…僕が行くよ。」

「え…。」

「ファイッ!」

アティラは、驚き半分、喜び半分でファイレルの方を見た。ファイレルの眼は本気だった。

さっきまで、叶わないと思っていたことを叶えてくれる人が目の

前にいたことに、アティラは我慢していた泣きそうな目に涙が溢れ、そしてこぼれた。

「ファイ、仕事はどうするんだ。」

通信機のようなものを持ちながらフォーカーのほうを見た。

「兄さん。これは僕が独断で決めたことだ。仕事とは関係ない。」

そう言って、またアティラのほうを見た。

「少し時間がかかるかもしれないけど、いいかな？」

その問いに、アティラはまだ涙が止まらない目で、答えた。

「うんっ！絶対、父さんに渡して…って、父さんの顔、知らないよね…。」

ファイレルが、親の顔を知らないと知ったアティラは、また“しゅん”となってしまうた。けどファイレルは、アティラの肩を叩くと、

「まだ諦めるのは早いよ。なんか、僕にわかる物を持ってるかな？」

そう言って、微笑んだ。

アティラは頷くと、自分の服のポケットから一枚の写真を取りだし、ファイレルに渡した。

「これは…。」

ファイレルは、そのあとの言葉を失った。それは、男性と女性と

小さい女の子が写ってる

アティラと家族の昔の写真だった。

「それは、私の家族の写真。宝物だけど、お兄ちゃんは私の願いを聞いてくれた。だから、父さんに手紙を渡しにいく間だけ、お兄ちゃんに貸してあげる。」

アティラは、頬に涙の跡筋を残しながら、子供のように笑った。ファイレルは、なぜかそれが辛そうに見えていた。なぜだかは、彼にも分からない。けど、自分が同じような顔をしてしまえばさらに辛くさせるかも知れない。そう思ったのか、ファイレルは、笑顔でごまかした。

「ありがとう…。」

「……。」

だとしてもアティラは、なんだか辛そうな顔をしている気がした。

(もしかしたら、自分のこと無力だと思ってるのか?)

そんな様子を見て思い、フォーカーはアティラ達がいるそばまで、通信機のようなものを持ちながら来た。フォーカーは、どうやら通信を待ってるよう。そして、なぜかファイレルの肩を叩いて、アティラの方を向いて言った。

「しょうがねえな…。俺は、独断決定が許せなくてね。その手紙届けるの…俺も手伝うよ。…アティラ。お前の代わりにな。」

「フォーカー…。」

その瞬間、やっぱりさっきのようなことを考えていたのか、アテ

イラの顔は明るい笑顔が、不安もない顔になっていた。

「ありがとうっ！お兄……いや、名前を教えて？」

そう言われた瞬間、二人は顔をあわせ、そしてまたアティラの方を向いた。

「…そういやアティラの名前は俺たちが知ってても、アティラが俺たちの名前を知らないと、それが“常識”ってやつだな。」

一瞬、フォーカーは通信機のようなものを見て、そして、目を擦りまたそれを見た。

「う…嘘だろ…。」

その通信機のようなものの画面には次の目的地と時間が書いてあった。

そして、その目的地は　　。

第7夜 家族（後書き）

…よ、予定よりかなり長い文になってしまいましたが、お付き合い
していただきありがとうございます。

これからも、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5350e/>

XXX吸血鬼（クロスヴァンパイア）

2010年10月9日01時17分発行